戦国史に屹立（きつりつ）する、不世出（ふせいしゅつ）の天才

「織田信長像」（全高約45㌢に及ぶ大型美術作品）

【天下布武】

時代の変革期には天才が現れる。

まさに信長は戦国に突如登場した革命者であった。小国尾張に生を受け、周囲を敵に囲まれて育った。だからこそ他のだれもが無し得なかった因習を打ち破り、日本統一という具体像を人々の目の前に指し示すことができた。

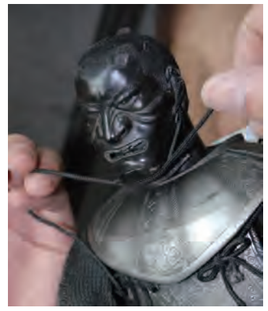
織田信長の登場は、日本史上の大きな転換点であり、その強力なリーダーシップは、四百年以上時を経てなお、現代人を惹き付けてやまない。変化が激しい現代を変革の時代と呼ぶならば、まさしく信長こそ、今求められるリーダー像といえるのではないか。軍師を持たず、自らを貫き通し稲妻のように生きた信長の思想や意志までも感じられるような彫刻作品をつくる、本作はそのような思いから十五年にしてたどり付いた、頂点の作品である。

【第六天魔王】

生殺与奪、全ての権限を有した戦国大名は、現代人とは全く異なる絶対者として君臨した。手にした権限が絶大であったがために、臣下にとって神にも近しい存在だった。

●南蛮兜に面頬を装着

厚い1枚板より板金でつくりだされる継ぎ目のない南蛮兜は、戦国期の日本の甲冑技術ではつくることが出来ない高度なものだった。



本作は面頬の奥に潜む「信長」の表情まで精巧につくりあげている。近寄りがたい存在感を演出するため、あえて面頬着用の像としている。（兜はお取り外しできません。）

日本を変えた天才“織田信長”世界初の完全立体化を実現

立体彫刻に歴史の浅い日本において、後世へ残すべき優れた武将彫刻として信長をつくり上げたかった。信長は芸術また宗教の庇護者でもあり、ヨーロッパの大帝にも匹敵する存在であった。再現するには史実や、甲冑などの資料的裏付けをとり、実在したであろう確かな信長の姿を再現することを第一としている。

信長像には、素材こそ鉄を用いていないものの、鎧の構造や金属の質感、色の再現にまでこだわり、精巧に再現した。陣羽織の代わりに宣教師風のマントをまとった本像からは、火縄銃を片手に戦場に君臨する信長の姿に思いをはせることができるだろう。

信長は自身を神と定め神格化したが、戦場で信長に従うものにとっては、まさしく神にも等しい存在であったといえる。面頬の中の信長の表情まで精巧につくり込んでいながら、あえて人間らしい表情を隠すことで、皆様の思い描く信長を投影してご鑑賞いただきたいと思い、本作をつくりあげた。

略歴／海野 宗伯

1962年生まれ。90年頃より安土桃山の造形美を求めて甲冑や武将像の制作を開始。日本を代表する甲冑師・三浦公法氏に依頼し、共に世界で初めてとなる本物と同素材・同製法による信長1／4創作鎧を完成。のち精巧な鎧装束の武将彫刻作品を制作する。

【南蛮胴具足着用】

南蛮胴具足とは、戦国期にポルトガルなどによって献上された貴重な甲冑のこと。板金技術に優れたこの鎧は、鉄砲に対する防御機能に優れていた。宣教師を最初に保護した「信長」こそが、この南蛮鎧を身に着けたはじめての人物ではないだろうか。また、信長はどの武将よりも早く、圧倒的多数の火縄銃を有し、戦国の戦い方を変えた。鉄砲によって天下統一を目前とした。火縄銃を掲げる、この姿そのものが、合理的で革新を好む信長そのものを象徴している。

【監修協力】甲冑師・三浦公法氏

（社）日本甲冑武具保存協会
（元）専務理事／（現）顧問

本像を制作するために、当世具足の第一人者で甲冑師の三浦氏に1／4鎧を、本物の鎧と全く同素材を用いて制作していただき、造形の基本とした。信長の現存資料は少なく、徳川家康が所有した南蛮胴具足等を参考資料とし、極めて精巧な鎧の復元に努めた。信長が南蛮胴具足を身に着けたことは文献にも記録が残されている。

限定制作50体 謙信工房手作り

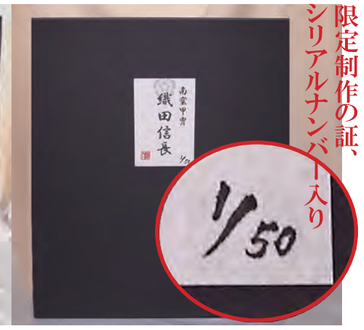
▲鎖かたびらの細部まで、精巧に再現されている

甲冑が正確に造られていることはもとより、造形細部の完成度まで高いクオリティを備えている。鉄砲の登場により、甲冑はよりからだにそったつくりとなり、動きやすさが重視されている。鉄・布・革など、甲冑各部の素材感も忠実に再現している。

【専用化粧箱入り】

工房にて少数手づくりされる信長像化粧箱には、限定制作のシリアル番号入り。けっして大量生産できない、限定制作であることを示している。複雑で精度を要求される造形は制作過程が膨大になる。鎧の質感を出すための磨き上げ、紐の結び上げなど一作にかかる制作時間はおよそ、30時間にもおよぶ。

●保管に最適な専用化粧箱付属



限定制作の証、シリアルナンバー入り